2/14 朝日

増える高齢者万引

孤独、寂しさ、病気、貧しさ…

お年寄りによる万引が増え続けている。一般刑法犯の高齢者のうち六割が万引だった。万引は、再犯が多いのが特徴で、衝動的に繰り返す精神疾患の人もいる。記者が万引Gメンに同行したところ、犯行の瞬間に遭遇。お年寄りの話から浮かんだのは、貧困問題だけではなく、満たされない思いや孤独感だった。（池田悌一）

一月下旬の昼下がり。南関東のあるスーパーで、万引Gメンの三浦大さん（四）が陳列棚の隙間から高齢男性の動きに目を凝らした。左手に買い物かご、右手にまんじゅう。周囲をうかがうように視線を泳がせている。「やると思います」。三浦さんがつぶやいた瞬間、男性はまんじゅうを上着のポケットに滑り込ませた。

男性は、買い物かごに入れた乾物の会計はレジで済ませた。だが、まんじゅうはポケットの中のまま。持参した黒いポリ袋に乾物を入れると再び売り場へ。今度は、棚の酒をつかむやいなやポリ袋に入れ、そのまま店外に出た。

「まだ会計が終わっていませんよね」。三浦さんに肩をたたかれると、男性は「あっ…」と目を見開き、あごを震わせた。男性は独り暮らしの八十歳。ポケットとポリ袋からは、まんじゅうと酒のほかにウニのパックなど約四千円相当の商品が出てきた。

三浦さんが「勝手に持って行ったらダメじゃないですか」と言うと、消え入りそうな声で「高い物だったので」。ところが、財布を見せてもらうと中には千円札が八枚。さらに内ポケットからは、「息子が仕送りしてくれた」という十数万円入りの封筒が出てきた。

金はあるのに、なぜ。「何となく、つい」。金を送ってくれる息子とは、顔を合わせることはない。寂しさから万引を繰り返しているようだ。

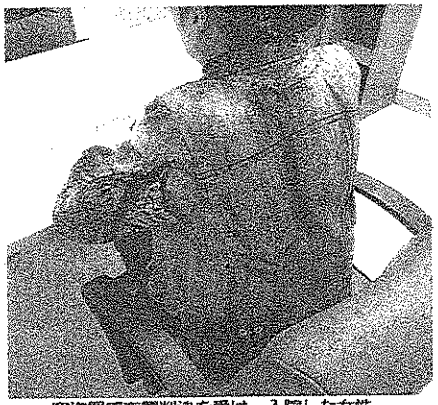
スーパーなどで保安員を務める三浦さんはこれまでに、万引に「生きがい」を見いだそうとするお年寄りを何人も見てきたという。

スーパーで総菜を万引した八十代の女性は、警察が来るまでの間、夫と死別して話す相手がいない寂しさを切々と語り、「自分では万引をやめられなかった。声を掛けてくれてありがとう」と頭を下げた。レンタルビデオ店でDVDを万引した七十代の男性の車からは三十枚以上の盗品DVDが出てきた。「人の目を盗むことに成功した瞬間だけ、生きていると実感できた」と話した。

三浦さんは「お年寄りの万引を見つけるたびに胸が痛む。心の通じ合う人がそばにいれば、やらずに済んだのかもしれないと思うこともある」と話す。

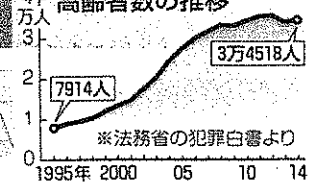
二〇一五年版法務省犯罪白書によると、一般刑法犯の検挙人数が戦後最少を記録する中、六十五歳以上の高齢者が占める割合は過去最高を更新した。万引を含む窃盗は約三万四千人。高齢者全体の六割に当たる約二万八千人が万引だ。窃盗は、二十年前の四倍に上る。

三浦さんの上司でGメン歴十五年の小林広一さん（四三）は「万引の傾向は大きく変わった」と指摘する。かつては、少年らが繁店やスポーツ用品店で万引するのが主流だった。近年は、成人が換金目的などで盗むケースが増えたという。中でも目立つようになったのが高齢者。小林さんは「動きが速くないので見つかりやすいという側面もある。『刑務所に六回入ったことがある』なんて言う人もいる」と話す。



窃盗罪で有罪判決を受け、入院した女性。「ストレスや寂しさで万引を繰り返してしまった」と話した＝群馬県渋川市で

スーパーで目を光らせる万引Gメンの三浦大さん（手前）＝一部画像処理



「心に空洞 やめられず」

「疎外感の軽減や人間関係構築を」

万引に走ってしまうお年寄りたちは、どのような心理状態にあるのか。群馬県渋川市にある「赤城高原ホスピタル」。アルコールや薬物依存症の治療が専門だが、衝動的に万引を繰り返す「クレプトマニア（病的窃盗）」の患者も診る数少ない病院だ。

昨年八月から入院生活を続けている七十二歳の女性。「捕まるたびに『もう二度としない』と誓うんです。でもスーパーに行くと、なぜか無性に物を取りたくなってしまう。ドキドキ感が癖になっているんでしょうね」と話す。

買い物かごには野菜などの食材を入れる。そして、カートに下げた自前の手提げバッグに素早くハムやソーセージを忍ばせる。店外に出て誰からも声を掛けられなかった瞬間、「あー、捕まらずに済んだ」と達成感が得られるという。

女性が初めて万引をしたのは十五年前。子ども二人が独立。「夫と二人暮らしになったストレス」で食材を盗んだ。その五年後、夫は病死。しばらくは万引から遠ざかっていたが、今度は生活への不安や寂しさからうつ病になり、気を紛らわせるために再び手を染めてしまった。罰金刑は二回。そして昨年八月、懲役三年、執行猶予四年の判決を受け、ここに入院した。

厚生労働省によると、クレプトマニアは精神疾患に分類されているが、患者数などのデータはない。

院長の竹村道夫さん（七〇）は「常習窃盗は犯罪と病気の両面で考える必要がある。病気の側面が強いのがクレプトマニアで、国内で認知されるようになってから十年もたっていない。近年は過度なストレスから発症する人も多く、診察が追いつかないほど患者が増えている。治療をせずに刑務所に入っても改善の見込みは薄い。再犯防止のためには、病気による万引があることを社会が理解することが大切だ」と話す。

現在、この病院でのクレプトマニアの入院患者は十代から八十代の三十数人。三割ほどが高齢者だ。精神科医らの診察を定期的に受けるほか、朝晩のグループミーティングで、各自が体験談や思いを吐露する。

竹村さんはこれまでに千三百人以上の常習窃盗患者を診てきた。女性の割合が高く、中には現役医師や大企業の社員も。摂食障害やうつ病などと併発するクレプトマニアが多いという。「治療は依存症患者の場合と似ていて、心の空洞を健康な人間関係で埋めることが大切。万引衝動を完全になくすのは難しいが、実行に移さないよう自分をコントロールすることは可能だ」と指摘する。

前出の女性は「万引の悩みや葛藤は誰にも打ち明けられなかった。入院したことで、ため込んでいたものを吐き出せた気がするし、被害者のことも考えられるようになった。今度こそやめられると思う」と話す。近く退院する予定という。

龍谷大の津島昌寛教授（犯罪社会学）は、「クレプトマニアのような依存としての万引が自立つのは、現代のストレス社会の一端を表している」と指摘する。「背景にあるのは社会的な孤立。高齢になれば活動の範囲は狭まり、社会とのつながりは薄くなる。昔に比べると家族や親族との関係も浅くなりがちで、精神的に追い込まれやすい」という。

高齢者の貧困問題もある。「経済的格差は高齢になるほど広がっている。生活保護などの支援策を充実させるとともに、ソーシャルワーカーの積極的なケアなどで疎外感を軽減することが必要」と強調。「緩やかな人間関係を地域で築くことが問題解決の一助になるはずだ」